

国会会議録の文体的特徴の探索的分析 —立法活動の特徴の客観的把握に向けて—

中川 侑

近年、公職選挙の投票率は極めて低い値で推移しており、投票率を向上させるためには、国民の政治に対する関心を喚起し、意思決定の参考となる理解の容易な情報を提供することが有効である。そこで政治学の高度な知識を持たない有権者の意思決定を支援する情報の提供に有用な知見の獲得と、立法活動の特徴の客観的な把握の実現に向けた基礎的な知見を明らかにすることを目的し、議員の発言の文体的特徴を計量的に分析した。

分析対象とするテキストは、国立国会図書館が提供する国会会議録検索システムを通じて取得した。本研究では同システムを通じて2013年から2015年までの衆議院通常会予算委員会の会議録を取得し議員の発言を抽出した。抽出したテキストに対し形態素解析を行い、TTRやSimpsonのDなどの要約統計量を算出し、主成分分析やランダムフォレストなどの多変量解析手法を適用することで、院内会派ごとの議員の発言の文体的特徴を比較した。

総合的な文体的特徴を比較した分析においては、ランダムフォレストを用いることにより、高い精度で院内会派の違いを判別することができた。また、院内会派間で感動詞の使用比率の差異が大きいことを明らかにした。さらに、野党よりも与党の方が感動詞の使用頻度が有意に多い傾向があることを示した。出現した感動詞の内訳をみると頻度上位の語は「おはよう」や「ありがとう」などの議論の内容に直接関係しない形式的な語彙であり、委員会質疑の形式を重んじ、儀礼的に審議を進める語彙であった。このことから、与党の議員は同じ与党出身の閣僚や、立場を同じくする省庁関係者などに敬意を示しながら質問を行う一方で、野党の議員は限られた持ち時間の中で効率的に本質的な議論を進めることを優先し、儀礼的な表現を省略する傾向があると考えられる。

接続詞に着目した分析では、議論の組み立て方、進め方に関連の強い接続詞の使用傾向が、与野党間では十分な差異があることを明らかにした。また、種類別の接続詞の使用傾向も与野党間で有意に差があることを示した。

今後は、本研究で有効性を明らかにした特徴をもとに、理想的な国会議員間の議論の様子を定義し、現状との数量的な差異を計量する方法を検討することで、立法活動の客観的な評価が可能になると考える。

(指導教員 芳鐘冬樹)